

# 「地域学総説」の挑戦 3

柳原 邦光\*

## The Challenges of Teaching the Theory of Regional Sciences: Part III

Kunimitsu YANAGIHARA

キーワード：地域，地域学，地域づくり，文化的個性，生の充実，ノーム，わたし（自分），人と人とのつながり，生きられた空間

keywords: region, regional sciences, community development in a region, cultural character of a region, a satisfying life, norm, self, social ties, espace vécu

### はじめに

「地域学総説」も本年度で3年目である。筆者はこれまで同様に授業の実施責任者を務めたが、本年度は一盛真准教授と二人で授業の進行にあたったほか、大学院生の小倉知子さんの協力もあって、ゆとりをもって授業を進めることができた。

授業内容についても、2年間の経験は大きく、これまでの「総説」で不十分な点や欠落しているところをはっきりしたので、とくに次の3点において補った<sup>1</sup>。ひとつ目は、どこに視点をおいて「地域」を考えるか、である（授業日程の第1部「地域とはなにか」）。二つ目は、「地域」のポジティブな側面だけでなく、ネガティブな側面も視野に入れて「地域学」を構想することである（第3部「地域学とは何か」）。というのは、これまでの「総説」が「地域」を常に肯定的に捉え、いいところばかりを強調してきたために、リアリティをもって「地域」を捉えることがむずかしく、このことが実践の学としての「地域学」にとって重大な欠点になりかねないと考えたからである。三つ目は、良き実践者に学ぶことである（第2部公開講演「地域を創るII」と第3部の「歴史的遺産と地域づくり—地方の可能性—」<sup>2</sup>）。これは「地域学」が生活者としての切実さを欠いた単なる理論や無目的な実践重視にならないためである。「地域学」が真に実践の学であるならば、理論構築をする場合も、具体的なよき実践例に学ぶべきであろう。さらにいえば、「地域学」はそこに具体的な形で現存しているかもしれない。

本稿では、まず、前半部で、授業の概要を紹介するとともに、「地域学」に組み込むべきであると筆者の考えるポイントを確認する。次に、後半部で、授業を通して筆者が理解した地域学を簡潔に述べる。こうして、本学部の「地域学」の現状を確認したうえで（もちろん、筆者の認識にすぎな

---

\*鳥取大学地域学部地域文化学科

1 [資料1]「授業日程」を参照。

2 [資料2] 公開講演「地域を創るII」を参照。鳥取大学地域学部では、「地域学入門」（1年生学部必修科目）と「地域学総説」（3年生学部必修科目）のうち、きわめて抽象度の高い講義を除いて一般に公開した。

いが)、今後の課題をいくつか提示して結びとしたい。なお、学生が授業をどのように受けとめたのかは重要であるが、紙数が限られているので、いくつか指摘する程度にとどめる<sup>3</sup>。

## 1. 授業の目的

最初に、授業をいかなる目的でどのように構成したかを説明すべきであろう。授業は「授業日程」にあるように三部構成にしたが、それぞれが明確な意図をもっていった。まず、第一部の目的は、地域を考える視点を確認することである。これには二つあり、どちらも欠かせないが、今年度の授業に初めて盛り込んだのは、後述する二つ目の視点、すなわち、地域という枠組みを自明の前提として、そこから考えるのではなく、「自分から地域を考える」という視点である。地域であれ、社会であれ、そもそも「自分」を抜きにしては意味をなさないであろうし、遠い抽象的な対象にすぎなくなるだろう。「自分」から地域をみればどうなるのか、これが出発点である。

第二部は、外部講師の方をお願いした。震災によって破壊されたまちを再建するという切実な課題に取り組みされた神戸の河合節二氏と、放置され荒れるがままになっていた山林の惨状を前にして、楽しみながら山林の再生に取り組みされた高知の中嶋健造氏である。後者の場合、当初は地域という意識は薄かったかもしれないが、結果的に地域に貢献している。ここでは、成功例からものごとがうまく進んでいくために必要な条件とは何か、確認しようとした。

第三部は、環境や教育と地域との関係を掘り下げたほかに、「自分」の人生を生きようとする生活者の立場から、地域のネガティブな側面を含めて地域の複雑さと危うさ、よき地域を創ることの難しさを、地域づくりの「失敗例」を通して浮き彫りにしようと試みた。しかし、その前に、「自分」の感性や考え方を大事にして「生活者」として工夫を重ね、よき地域を創ることに貢献してこられた松場登美氏にお話をさせていただいた。お話の内容については後述するが、スクリーンに映し出された映像の美しさ、古きもの、在るものを愛しみ新たな生命を与えていく生活の温かさが伝わってきた。この二つの事例は対照的なものであるが、第二部の外部講師の方のお話を含めて、このような事例の比較を通して、「自分」と地域との関係をより深く考察しようとしたのである<sup>4</sup>。

講義全体を貫く目的は次の二つである。ひとつは、「自分」から地域を考えること、二つ目は、そこから地域学を構想することである。これがこれまでにない、今年度の新たな挑戦であった。これから授業の概要を紹介するが、授業のすべてではない。あくまで上記の目的に直接関係する授業・部分だけを取り上げる。そのことを予めお断りしておきたい<sup>5</sup>。

3 学生には、毎回、授業の最後5分あまりの時間で疑問点と感想を書いてもらった。疑問点については、必要に応じて講義をおこなった教員が文書で回答した。また、記述内容は最終回のディスカッションでの論点を考える際に参考にした。

4 「地域学総説」では地域での住民の活動をいくつか取り上げたが、その目的は地域性を比較して優劣を論じることではない。住民の日常が少しでも生きやすいものになるにはどのような条件が必要なのか、それを考えようとしたのである。

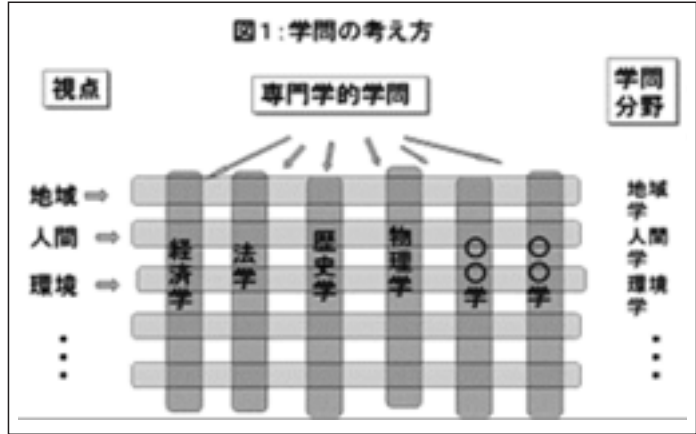
5 本稿では、一盛真准教授の「地域と教育」と小玉芳敬准教授の「景観変遷から読む鳥取の風土と人々の暮らし―身近な鳥取のことを知ろう―」については紹介しない。というのも、「地域学総説」には複数の目的があり、両報告は本稿で紹介するものとは異なる目的をもつものとして、当初から位置づけられていたからである。一盛報告は後述する吉村報告と奥野報告とともに「地域で人が育つとは」という、「地域学総説」に不可欠の大きなテーマに組み込まれている。学生たちは、この報告を通して地域・家庭・学校の関係の歴史的变化を知り、今日的な課題を長いタイムスパンで考えるための重要な示唆を得ることができたであろう。残念ながら、考察が複雑になりすぎるために、本稿では家庭と学校というファクターを組み込むことはできなかった。小玉報告は、地域のありようと自然環境との関係、とりわけ人の生活と地形との関係を考察している。地域を考える際の柱のひとつである環境という視点は、本年度のテーマと直結していないが、これもまた「総説」にとって不可欠なものであることはいままでもない。

## 2. 地域とは何か—地域を考える2つの視点—

### (1) 俯瞰的・客観的視点

それでは、地域を見る二つの視点について、光多長温教授の「地域を見る視点」と吉村伸夫教授の「地域で生きる」から検討してみよう。両者の視点は、地域の存在を自明の前提とし、それを対象化して、抽象的、分析的に捉えようとするものである。

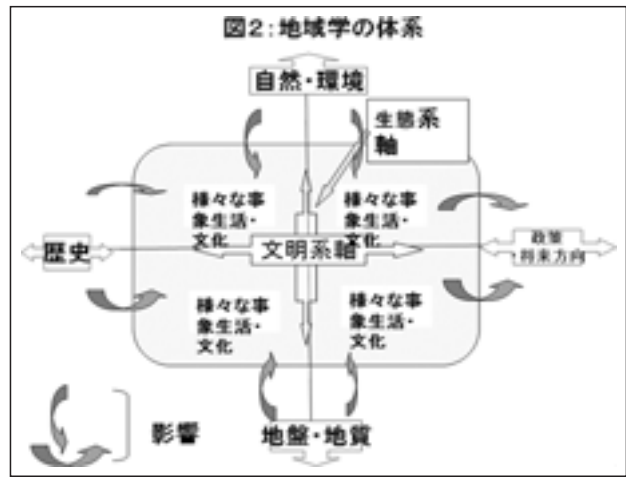
光多教授の場合、地域と地域学についての見解は、図1と図2に端的に示されている。すなわち、



地域とは、自然・環境・地盤・地質といった生態系軸と歴史などの文明系軸とが交わったものであり、そこに地域の生活や文化が存在している。これに政策・将来方向が加わって新たな地域が創られていくのである(図2)。

このように地域とは、過去も含めたあらゆる要素の複合体であるから、これを研究対象とする地域学も、経済学や法学などのように縦割りの関係ではありえない。地域という視点からすべての学問領域が動員されるのである(図1)。したがって、地域学とは次のように定義される。「地域の諸

事象について、時間(歴史)・空間(場所)・主体(人)という三位一体的座標軸を組み合わせた視点から統合的・俯瞰的に把握するもの」である。また、次のようにも定義される。「学者、学生、地域住民、行政等がネットワークを構築しつつ協力して、地域の『自然』『人』『事象』『歴史』『文化』『産業』『生活』などを総合的に研究し、個々人の地域観(=社会の見方)を確立し、人材の育成を通じて地域活性化や地域づくりへの動機づけを図っていくとするもの」である。また、地域学の特質として、客観的研究と行動



科学の融合、すなわち、「事実の把握(Sein)とあるべき姿(Sollen)の視点の保持」が挙げられている。言い換えれば、地域学は、地域がどう在るかを研究するだけでなく、地域のあるべき姿を思い描いて、それを実現すべく実践するものなのである<sup>6</sup>。この光多説は地域と地域学の構造を見事

6 光多教授の見解については、詳しくは、柳原邦光他『『地域学』を創る—鳥取大学地域学部の試み—』『地域学論叢(鳥取大学地域学部紀要)』第4巻第3号(2008年)372～375頁を参照。図1と2も同所から引用した。

に説明しているといえるだろう。

次に、吉村教授の「地域」理解（以下、便宜的に吉村説と表記）<sup>7</sup>を紹介しよう。吉村説はとくに文化に着目したもので、次のように説明される。地域とは、「人間の生活をトータルにみたときに現れてくるまとまりとその空間」、独自のノーム体系（地域の人々に共通の行動規範・振舞い方・考え方や感じ方）をもち、「当たり前さ（厳密にはその尺度）を共有する人々が形成する社会的まとまり」、「精神的な意味での生活の質の向上という視点から考えて、どのような状態が実現しているときに満足できるのか、幸せなのかという感覚を共有している空間」、である。要するに、地域とは、固有の文化的個性をもった空間で、住民を一人前の人間につくりあげてゆく「文化的装置」である。地域は「自分」に先立って存在し、「自分」を作り上げていく存在だといえるだろう。吉村説が「地域」を重視する理由はまさにこの点に関わる。地域の文化的個性は、地域を生きるものにとって自己の尊厳の一部であり、「生の充実」にとってきわめて重大な意味をもつからである。それだけに、地域の文化的個性が否定されることは、地域という人間社会の尊厳だけでなく、個人としての尊厳を否定されることを意味している<sup>8</sup>。

それでは、吉村説のいう地域学の究極の目的は何であろうか。それは、一言でいえば、「人の生の充実」、すなわち個人の「生の充実」である。これは重要なポイントであると思われる。なるほど、「尊厳」は地域にも個人にもある。すでに述べたように、個人の尊厳は地域の尊厳（文化的個性）と深く関わっている。しかし、吉村教授は地域において個人の尊厳・人権が認められないケースを指摘して、尊厳について素朴な理解にとどまっていはならないという。つまり、地域の文化的個性と個人の「生の充実」とが衝突する事態がありうるのだ。講義の最後が「人まかせで生きるな！」であったことが端的に示しているように、吉村説は個人と個人の尊厳を地域の定義と地域学の核心部分に据えた、と筆者は理解している。吉村説はいわば地域の理念型を提示したものであり、現実がまるごとこの見方に収まるわけではないが、個人と地域との関係を明示したことは注目に値する。

## (2) 「わたし」からの視点

次に二つ目の視点を紹介しよう。まず、仲野誠准教授の「自分から考える地域—わたしがここで生きるということ—」である（氏の見解は以下、仲野説と表記する）<sup>9</sup>。仲野准教授は、地域を見る二つの視点を象徴的に表現する。ひとつは「鳥瞰」で、鳥のように「上から全体を見る」、あるいは「外から考える」、抽象的、分析的視点である（光多説と吉村説）。もうひとつは、「虫瞰」で虫のように地べたから、あるいは「足元から」、「内から考える」視点、具体的、記述的な方法である。別の表現をすれば、前者が地域の存在を自明の前提として客観的に地域を捉えようとするのに対して、後者は「わたし」から出発する。「わたしのリアリティ」、「わたしによって生きられた地域とは何か」から地域に迫ろうとするのである。もちろん、二つの視点は排除しあうものではなく相補的で

7 吉村説については、バーバラ・ロゴフ（當眞 千賀子訳）『文化的営みとしての発達』（新曜社、2006年）、ウィル・キムリッカ著、千葉眞・岡崎晴輝他訳『新版 現代政治理論』（日本経済評論社、2005年）を参照。

8 吉村教授は「尊厳」を次のように説明している。「『自己決定権・自律権』に留まるのではなく、その根を『自己定義権』の深みに見いだすものである。まず自分が何であるかを自らが定義することを許されなければ、自己による決定も自律も、所詮は無内容なのではあるまいか。」柳原他前掲論文 377頁。

9 仲野准教授の見解については、仲野誠「おもしろく誇りをもって生きるということ—」、(財)鳥取市人権情報センター『架橋』第18号（2008年3月）、54～59頁を参照。

あるとされている。仲野説は後者である。以下、できるだけ仲野准教授の表現に忠実にまとめてみよう。

「地域学」は「地域」を強調し、「地域」という枠組で考えることを要求する。しかし、わたしたちは「地域」を、その重要性を本当に実感できているだろうか。もしそれが難しいのなら、徹底的に自分の足元から考えてみてはどうか。たとえば、わたしは楽しい豊かな生活を送っているだろうか。生き生きとした毎日を過ごしているだろうか。自分をかけがえのない存在だと思えるか。誰かに大切にされていると思えるか。誰かを大切にしていると思えるか。自分の胸に小さな誇りを抱いているのか。もしそうでないなら、どうしたらそう思えるようになるのか。このような様々な問いを自らの心に発してみたとき、自分を肯定できるか否かは、他者とどのような関わりをもっているか、つながりを築いているのか、という問いに行き着くのではないか。

「自立」して生きる。これは通常肯定的に語られる。しかし、本当にそうだろうか。実際には、「わたしの幸福」を作る仕掛けがあるのではないか。たとえば、家族、学校、会社、地域である。このような中間集団の中で他者と関わりをもつて生きることと「わたしの幸福」との関係を考えるべきではないか。「わたしは支えられている/わたしは支えている」という実感が「わたしの幸福」の源なのではないか。「地域」とはそのような人と人との関係の一つではないのか。こうした関係を自分達の手でつくっていくことが重要なのではないか。それには、これまでのように、何かを手に入れること、増やすことばかりに励む（拡大論的な発想）のではなく、与えること、返すこと、手放すことも考えて、そのような関係性を構築することが必要なのではないか。「地域学」とは、当事者性（自分の人生の主人公であることを貫くこと、自分の心の中に小さな誇りをもつこと）を確認し、拡大論的な発想を反省して、新たな関係性の構築を目指すものではないだろうか。地域活性化自体が目的なのではない。いい人生を生きたい。しかし、「人に迷惑をかけない」ではなく、「人に頼り、また人を助ける、自分が弱っても倒れない関係性」をどうやってつくるかが問題である。こうした努力をすることで、地域もよくなっていくのではないか<sup>10</sup>。

以上が仲野説の骨子である。このような視点にたつとき、「地域」と「地域学」は光多説や吉村説とは異なる顔を見せることになる。「地域」は感覚的に遠かったが、一気に身近で具体的なものとなる。いかなる点に着目して、どのように判断すればいいのか、何を目指せばいいのか、はっきり見えてくるだろう<sup>11</sup>。ただし、仲野説の「地域」とは、「わたし（自分）」からみた主観的世界（「わたしによって生きられた地域」）であるから、第1の視点からみたときの一定の形をもつと想定される「地域」とは異なるはずである。

もうひとつ、人を中心に据えて、人が育つということから地域を考える見解を紹介しよう。奥野

10 以上の話は、会津若松出身で現在鳥取市で漆器等を扱うお店を営んでおられる橋谷田岩男氏との対談を通して具体的に確認された。橋谷田氏のお話は、含みのあるものであったが、それをあえて単純化してそのエッセンスを紹介すれば次のようになるだろう。文化を異にする地域に入っていくのは容易なことではない。しかし、ひととは一人では生きてゆけない。他の人を無視して生きることはできない。人を遠ざけてしまうひとには何も残らないだろう。確かに自分を抑えなければならないことが少なからずある。しかし、どこかで自分らしさを保ちつつ、人と関わることが必要だ。地域は人の塊である。挫折したとき、人に助けもらった。誰か自分を助けてくれる人が必ずいる。その人を大事にする。そうすれば助けてくれる。悪いものだけでなく、いいものに目を向けよう。いいものといいいものがくっつけば、もっといいものになるのではないか。いいものを残して死んでいきたい。

11 学生のレポートはこの点に敏感に反応している。「地域学」は「わたし」と人とのつながりを考えることから始まる、と。

隆一教授の『「育つ」から地域を考える』である<sup>12</sup>。この講義で注目すべきは、「育つ」とは「育ち合い」であるという指摘である。例として挙げられたのは、赤ちゃんとお母さんとの関係である。真っ先に思い浮かぶのは、「育つ」のが赤ちゃんで、「育てる」のが母親だということである。しかし、これとは逆の関係もある。赤ちゃんは泣くことで自分の欲求を伝え、母親は泣き声から何を求められているのかを判断する。この場合、確かに母親は育てる主体なのだが、他方で子どもの泣き声によって育てられてもいる。母親として「育つ」のである。赤ちゃんと母親は、どちらも「育つ」存在であり、同時に「育てる」存在でもある。すなわち「育ち合い」である。

以上から、「育つ」が「関係性」の中で行われていることがわかる。この関係性は人と人との関係にとどまるものではない。人と環境（自然環境、社会環境、諸制度など）との間にも成立する。「育つ」はまた子ども期だけのことでなく、生まれてから死ぬまでのすべての過程についていえることである。

この「育つ」＝「育てる」からみたととき「地域」はどのように見えるのか。「育つ」＝「育てる」を支えるのが「地域」である。ここでは、地域は人間関係や諸制度、子育て文化などのネットワークの形をとる。しかしまた、「育つ」と「地域」を前述した関係性において捉えることもできる。「地域」を構成する人・モノ・制度は「育つ」ことの必要性に応じて生成・発展・変化していくからである。したがって、中山間地で起こっている現象、たとえば、保育所・幼稚園・小中学校の統廃合と広域化（制度の衰退、あるいは地域によっては制度の消滅）は、「育つ」という機能の衰えでもある。それは子どもが育つことを損なうだけでなく、地域が育つことも難しくしている。

このように「育つ」という観点からみたととき、地域にとって何が必要か、何が失われたとき地域が危機に瀕するのか、何を維持すべきかが明確になる。

仲野准教授は、二つの視点を説明する際に、「現場にいるからわからないこと」と「現場にいなければわからないこと」という表現で、それぞれの視点の必要性和問題点を指摘している。見方を変えれば、二つの視点を対立的に捉えるのではなく、相互補完的に活用すべきだということでもある。筆者は、「地域学」は学である以上、論理化・抽象化・客観的把握を目指さざるをえないが、それだけに「わたし（自分）から考える地域」という視点が欠かせないと思う。「地域学」の必要性和具体的な生きた目標は、ここから生まれるのではないだろうか。

この「わたし（自分）から考える地域」という視点は、実はごく当たり前のように実践されている。われわれはそうした良き実践例から学ぶべきである。

### 3. よき実践から学ぶ

#### (1) 河合節二氏「震災からのまちづくり」

神戸市長田区野田北ネットの河合節二氏のお話を初めて聴いたのは、昨年の鳥取市主催の「市民

12 奥野教授の見解については以下の文献を参照。前田正子『子育てしやすい社会—保育・家庭・職場をめぐる育児支援策—』（ミネルヴァ書房、2004年）、大豆生田啓友『支え合い・育ち合いの子育て支援—保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論—』（関東学院大学出版会、2006年）、山岡テイ『地域コミュニティと育児支援のあり方—家族・保育・教育現場の実証研究—』（ミネルヴァ書房、2007年）、北野幸子、立石宏昭編著『子育て支援のすすめ—施設・家庭・地域をむすぶ—』（ミネルヴァ書房、2006年）、小川信子『子どもの生活と保育施設』（彰国社、2004年）。

フォーラム」においてである。太い地声もそうだが、何よりその内容に圧倒された。フォーラムが終わるとすぐに「地域学総説」でお話していただこうと思った。学生に聴かせたいからであるが、そう判断したのは、出来事の深刻さにもかかわらず、気持ちが和らぐような心地よさをお話から感じたからである。

野田北は阪神淡路大震災で壊滅的な打撃を受けた。そのためまちづくりを文字通り一から、否、マイナスからやり直すことになった。建物等の再建というハード面の課題からそのあとの住民同士の絆の再生というソフト面まで、課題は山積していた。河合氏はハード面の仕事を終えたとき、まちづくりがあまりにも大変で、一度はもうだめだと諦めた（「わたしは一度死にました」）、といわれる。それほど過酷な体験だったということであろうが、それでも何とかもちこたえることができたのはなぜだろうか。そのエネルギーはどこからきているのであろうか。

それを考えるヒントが河合氏の言葉の中にある。「生活環境を少しでも改善したい。」「この地区をいつまでも住み続けられるふるさとにしていきたい。そういう思いが住民のなかにはありました。」最初の言葉は震災前からの住民の思いである。もうひとつは、震災後のものだ。どちらもとりようによっては平凡な言葉であるが、野田北の皆さんの志が感じられる<sup>13</sup>。こうした住民の思いがぎりぎりのところで支えとなったのではないだろうか。

とはいえ、何もしないで踏ん張れるものではない。河合氏が紹介されたのは、情報を共有して、相互理解をはかることである。その具体的な表れの一つが「野田北ふるさとネット」（2002年）で、「これは地域内の様々な団体や人々をネットワークで結ぶ役割を担っており、各団体がゆるやかな連携を取りながら、毎月1回定例会を開いて情報交換や企画運営の調整などを行っているという<sup>14</sup>。ここで注目したいのは、「ゆるやかな連携」と誰でも参加できることである。強固な連携にしてしまうと、諸団体やメンバーの間に力関係というか、中心というか、そのようなものができて、命令系統や義務感のようなものが生まれてしまう。こうなると、メンバーは重苦しさや辛さを感じて、次第に参加しなくなってしまうのではないか。また、誰でも参加できる（「開かれている」）ということは、一部の人間だけで決定してしまわないために、さらにはそういう印象を住民に与えないためにも重要であろう<sup>15</sup>。

もうひとつは、毎月1回の地域情報誌「わがまち野田北かわらばん」の発行（2001年）である。一部の住民だけでなく、すべての住民に情報を伝えるために、この地域情報誌を全戸配付しているという。情報を一部の人間が独り占めしない。情報をすべての住民に伝えることで、その共有をはかるというのである。この「かわらばん」はなかなか面白い。自治会の行事や情報だけでなく、住

13 光多教授が指摘されているように、地域をみると、歴史的にどのように形成されてきたのかという視点が欠かれない。河合氏も最初に野田北の歴史を紹介された。それによれば、この地域は木造長屋形式の住宅がびっしりと建ち並ぶ住宅密集地域であった。自ずと濃密な人間関係と独特の文化ができたが、路地のなかには人がすれちがえないほど狭いものが少なくなかった。広い公園はなかった。そのため震災前から住民の間に生活環境を改善したいという思いが強く、協議の場（「まちづくり協議会」、1993年設立）も設けられて、実際に、大国公園のリニューアル、車歩分離、コミュニティ道路の建設などが進められていた。震災はこうした努力の成果を無に帰したが、震災後、住民が驚くほど早く動き出し、じっくりと話し合いながら粘り強く復興を実現できた背景には、こういう事情があったという。

14 野田北ネットのホームページで具体的な活動や結成の経緯を知ることができる。

15 女性の参加はどうだろうか。河合氏のお話をまとめれば次のようになる。まちづくりをするには女性に逆らってはいけぬ。日常を支えているのは女性である。幼児がいればお手伝いに行くというくらいで、男はありがとうという気持ちを込めてしている。

民の個人的な経験や思い、町の歴史など、軽いタッチで描かれている。読んでいて、思わず笑ってしまうところが随所にあった。さすがに関西人である。

表現の仕方も、肩肘張らずに、なんでもいえそうな雰囲気である。情報の共有に加えて、この雰囲気も重要であろう。何でも言い合えるのは、素晴らしいことではないか。驚いたことに、野田北の「美しいまち宣言」(2004年)には「なんでも一緒にやれる、なんでも言い合える」というスローガンが掲げられている。しかもこの宣言の文章は日常の言葉で書かれている。よそいきの表現ではない。ビデオでも、住民は集まりでよく発言していた。あんなことをいっても大丈夫だろうかと思えるようなことも、平気である。何でも言い合えるというのは、地域にとって何物にもかえがたい貴重な財産ではないだろうか。もちろん、スローガンに掲げているということは、裏を返せば、それも努力の賜物だということだが<sup>16</sup>、何でもいえることで、自分の存在が認められていると感じるであろうし、多くの人々が知恵を働かせて、それを集めて生活をよくしていくことにつながっていくだろう。

「野田北ネット」(2002年)、「わがまち野田北かわらばん」(2001年)、「美しいまち宣言」(2004年)を通していえることは、住民間で情報と理解を共有して、できるかぎりしっかりした合意を形成しようとしていることである。この意欲と態度が決定したことを実現するために必要であろうし、さらには、「いつまでも住み続けられるふるさとにしたい」という切なる願いを実現するために欠かすことができない重要な前提条件であろう。それにしても、野田北の住民はどうしてこのような意欲と態度をもつことができたのであろうか。河合氏によれば、「合意形成に王道なし。地道にやるしかない。」筆者が想像するに、おそらく震災(1995年)からのハード面でのまちづくりで苦労を重ねるなかで住民がたどり着いた認識であり、そこから生まれた工夫であろう。苦悩と知恵の結晶と考えるべきであろう。

情報と知恵を集めるという意味では、行政や専門家の役割も欠かせない。もちろん、まちづくりは住民の意思だけで完結する問題ではない。とくにハード面から作り直す場合、国・県・市など行政との協議がきわめて重要になる。この点に関して、河合氏のお話は実に興味深かった。たとえば、市の担当職員は一定の期間が過ぎれば他の部署に移ってしまうことが多い。せっかく意思を通い合わせるができるようになって、担当者が代わればまた最初から関係をつくらなければならない。面倒なことだ。普通はこう考えてしまうだろう。しかし、野田北のみなさんは違う。市の職員も住民の話し合いに熱心に参加されていたようで、住民との間に「友達感覚」ができたという。そのおかげで、職員も本当のことをいってくれたし、部署がかわっても連絡を取り続け、関係がなくなることはなかった。むしろ、話の分かる人のいる部署がどんどん増えて、情報が入ってきやすくなった、というのである。本気で話し合えるということは素晴らしい結果をもたらしてくれるようである。

河合氏は講演の最後を次の言葉で締めくくられた。「震災で自分が瓦礫に埋まってしまったとき、いつ助けてもらえるか、考えてみてください。最初に助けてもらえるのは人から好かれている人です。とことん嫌われている人でも、最後に助けてもらえます。しかし、助けてもらえない人がいます。それは空気のような人、存在が薄い人です。自分の存在が空気のようにならないようにしましょう。」これは人と人とのつながりの重要性を教えてくれる究極の殺し文句であろう。

最後に、野田北には地域が発展していくための前提条件が備わっているのではないだろうか。ま

---

16 「美しいまち宣言」や実際の活動内容を決定するために、「美しいまち宣言ワークショップ」を7回行って、全世帯から意見を集めたそうである。



た、自分の生活と地域を良くしていくことが重なってもいる。「自分のため」と「地域のため」がつながっているからこそ、エネルギーが沸いてきたのではないか。逆に言えば、情報を共有しない、発言もできない、あるいはそれを許さないような雰囲気当たり前のところでは、野田北のような好循環は生まれまいだろう。

## (2) 中嶋健造氏「小規模林業を見直してみませんか

### ～小規模林業の復活で森林の再生と山村活性化を～

NPO 土佐の森・救援隊の中嶋健造氏のお話は、植林されたものの放置されて荒れるがままになっている山林（人工林）で間伐を行い、伐採した木材をお金に換えて楽しみつつ、人工林の再生に貢献しようとするものである。こういうとシンプルなお話のように思われるかもしれないが、実際にはとても驚かされることが多い。というのは、中嶋氏の NPO 活動には知恵がぎっしりつまっているからである。

講演冒頭で紹介された写真をみると、山林の現状はひどいものである。樹木がみな伐採されてはげ山になってしまったところや、採算が合わず手入れされなくなった人工林では、「沢抜け」、「表層崩壊」など山崩れの危険があるという。この意味では確かに憂慮すべき事態であるが、しかし、土佐の森・救援隊に「震災からのまちづくり」のような深刻さはなく、溢れんばかりのアイデアの源は、遊び感覚というか、「ああ気持ちがいい」、そんな感覚にあるようである。

アイデアの一端を紹介しよう。たとえば、「モリ（森）券」である。間伐はボランティアで行うが、まったくの無償労働ではなく、「モリ券」が提供される。これは間伐材を売却して得た収入をもとに発行される地域通貨で、この券を使って近隣の商店で地場産品を買うことができる。額が限られているとはいえ（160万円/年）、地域も潤うのである。伐採参加者の楽しみはなにがしかの金銭的利益となって参加者にも地域にもかえってくるのである。

これだけでもなかなかのものだが、さらなるアイデアは、木をチップに変えてペレットとして販売し二酸化炭素の削減に貢献するところまで進み、実際に、事業化されつつある。その先には排出権取引にしようとして考えているそうである。まったく驚くほどの発展ぶりである。

どうしてこういうことができるのだろうか。事業化するには、それなりの条件が必要である。間伐材を安定的に供給できるか。処理のための設備はどうするのか。採算は取れるのか。問題山積のはずである。われわれはすぐに企業のような組織が必要だと考えてしまうが、この形だと採算は取れないという。むしろ、企業ではなく、土佐の森・救援隊のように個人が集って、主たる生業としてではなく、個人の副収入として、小規模に間伐材を集める方が安定供給を可能にするそうである（データをグラフ化して説明された）。個人のボランティアのような活動をベースとする緩やかな組織化であるからこそ、成算が出てくるというのである。

こうして土佐の森・救援隊は、間伐をしてみたいというサラリーマンの隠れた欲求を引き出し、地域のシステムの中に取り込み、結果的に地域に貢献しているのである。都市の住民が農村にやっけてきて、地元住民も交えて作業することは立派な交流で、これもまた地域への貢献であろう。

それにしてもかなりのリスクが生じるはずであるが、感心するのは、様々な活動を見事に連動させながら、あるところでは緩やかな活動ぶりであるが、別のところでは、徹底的にアンケート調査をして、活動の成否を検討するなど、まさにプロなみの手腕を発揮していることである。しかも必要とあれば、国から補助金を取ってきたりもしている。

そうなると、林業関係の専門家との見解の相違が明らかとなって、難しい局面も出てきたという。

ある意味、公の事業として林業を広域的に、制度的組織的に管理運営しようとする専門家から見れば、中嶋氏たちのプランは成算のない、実現不可能なことにしか思えなかったようである。もちろん専門家の見解は尊重すべきであるが、専門家とは異なる小さな規模で考えることにも意味があるのだ。そういうことを土佐の森・救援隊の活動は教えてくれる。

それにしても大変な能力と知恵である。いったい誰が考えているのだろうか、講演会の後で中嶋氏にうかがったところ、中嶋氏本人ともうひとりの代表の方が中心になって進めておられるそうである。中嶋氏は元経営コンサルタントのサラリーマン、もう一人の方は県庁職員だそうで、豊かなアイデアと組織力はそういう経験からきているのであろう。

中嶋氏たちは、「素人が口を出すな」、「馬鹿なことをいうな」という意味のことをいわれたことがあったそうである。筆者も「東京や大阪で経営コンサルタントをしていた人間に何がわかるか」と思ったかもしれない。「この分野は自分が専門だ」とか、「地域のことは住民しかわからない、口を出すな」というばかりでは、いけないのであろう。それまで関わってこなかったからこそ見えてくるものがある。出てくるアイデアがある、と考えた方が、先が開けるかもしれない。

「地域」に関わる場合も、よそ者だ、素人だといって排除するのではなく、さまざまなひとの知識や知恵がうまく発揮できるような条件をつくることが重要であろう。「あれはいかん、これもいかん」といっていたのでは、いい地域をつくることはできない。

### (3) 松場登美氏「歴史的遺産と地域づくり—地方の可能性—」

松場登美氏は、2007年に世界遺産に登録された石見銀山遺跡のある島根県大田市大森町で、群言堂・石見銀山生活文化研究所・他郷阿部家を経営されているが、本業は服飾のデザインをなさっている。様々な記事やテレビでも紹介されているので、ご存知の方も多いただろう。

筆者は実家が、大森町から10kmばかり離れた町にあり、子どものころ、遠足といえば行き先は必ず「大森銀山」（地元の人間はそう呼ぶ）であったから、この町は昔からよく知っていた。ところが、あるとき、久しぶりに訪ねてみると、かつての寂れた町は落ち着きのある、感じのいい町に変わっていた。傷んでいた古い民家が徐々に修復されてきれいになったこともあるだろう。驚いたのは「ブラハウス」（群言堂の前身）である。田舎とは思えないシックな店で、普通の大きな民家にみえる建物の内部に入ると、そこは別世界であった。町の雰囲気はその後ますますよくなって、筆者は帰省したときは必ず群言堂に立ち寄るようになった。

「地域学総説」を担当して「地域を創る」という発想が筆者の中に芽生えてから、群言堂の方にお話を聴いてみたいと思うようになった。松場氏のことを知ったのはその頃で、新聞や田舎の知人の口を通してである。昨年、「地域学入門」（1年生の必修科目）で講演をお願いしたが、あいにく世界遺産登録の時期で、実現しなかった。それで今年は「入門」ではなく「地域学総説」で、「暮らしを創る」という観点から石見銀山・大森町という歴史的遺産とともに生きる暮らしについてお話していただくと考えた。本年度の「総説」のテーマ「自分から考える地域」にとって「暮らし」が重要であることはいままでもないし、松場氏のホームページ「阿部家日誌」は、はっとするような言葉に満ちていたからである<sup>17</sup>。

「阿部家日誌」から少しばかり引用してみよう。講演の冒頭にも同じ趣旨の言葉があった。「私達の住む町並みが世界遺産としての価値があるならば、そこに住む人達の静かで平和な暮らしや、創

17 授業では、「阿部家日誌」の一部をコピーして学生に参考資料として配付した。

造的活動のある暮らし、あるいは住みながら生計を立てるがための仕事場があってこそ、その価値があるのではないだろうか。観光客という大きな津波が襲って来た時、この幸せを守る術を私達は未だ知らない。」必ずしも世界遺産登録に賛成というわけではないのだ。暮らしあってこそその世界遺産だからである。暮らしを重視する。これが松場氏の基本的スタンスであろう。

大森町は人口 470 名ばかりの小さな町である。当然、「なにもない」と思いがちであるが、松場氏には、「日々ここで楽しく暮らすことで、自然と向こうから語りかけてくるように宝物が見えてきた。」「宝物」とは、たとえば、歴史ある町のたたずまい、自然、家の側を流れる清らかな川、満天の星のことある。「自然と向こうから語りかけてくるように」という表現が筆者の心をとらえた。

松場氏のお話には、短い思わず考えさせられる言葉が多い。たとえば、「土地の声を聞く」、「家の声を聞く」である。これはどういう意味だろうか（講演の際に、家中茂准教授から出た質問でもある）。講演のほかに、西村幸男氏との対談記録「松場登美一石見銀山一足元の宝を見つめて暮らしをデザインする」<sup>18</sup>から言葉を拾ってみよう。「土地の声を聞く」に関係すると思われるのは、次の言葉である。「歴史的に紡がれてきたことには何か意味があることが多いのです。そういう歴史の中で育まれてきたものを尊重するところから、新しい見方が出てきます。あの町並みならこういう店になるのではないか、とか。そこから調和したものが生まれるのです。」「大地から力をいただいて物をつくっているような気がします。」「土地の力に守られて今日まできたような気がします。」「ここに住むようになって贅沢のものさしが変わりました。」「人間らしい、心に素直に響くような生活をしたのです... こういう生活をしていると、自分の中から人間的な能力が出てくるような気がします。」

「家の声を聞く」については、対談記録の中に、買い求めたタペストリーが茅葺の家に似合うかどうか友人のアメリカ人に聞いたところ、「掛けてみればいい。家が選ぶから」といわれて、試してみても、結局、外したというお話がある。松場氏は「判断したのは私自身ですが、選んだのは家だと思います」と述べている。また、阿部家のお話も面白い。この家は元武家屋敷で、築 230 年になるそうだが、松場氏が手を入れる前は、荒れた、とても人が住めそうにない廃屋であった。修復工事の途中までは、「もう少し頑張って。ちゃんと直してあげるから」と、「～してあげる」という立場にいたが、修繕が進むにつれて、家は品格を取り戻し、ある種の風格さえも醸し出すようになり、立場が逆転した。今では、「この家は、私に心の落ち着き、安心を与えてくれている」という（もちろん、完全に復元したのではなく、新たな工夫が随所に加えられている）。

このような土地や家と「わたし」との微妙な補い合い、支え合う関係、そこから生まれる穏やかで力強い感覚と喜び。「群言堂」の仕事もこうした暮らしをベースにして発展してきたようである。それを象徴する言葉がある。「復古創新」。古いものを大事にする。が、それだけでなく、今を生きている自分たちの感性を活かしながら、新しい創造性を加えていく。そうすることで新しい価値が生まれる。そこから経済が回り、さらに手を加えていくことができるようになるという<sup>19</sup>。

---

18 西村幸男、埴正浩『証言・町並み保存』（学芸出版社、2007年）所収。このほかに、石見銀山と大森町の美しさについては、いなとみのえ『石見銀山 四季 暮らしものづくり』（織研新聞社、2006年）参照。石見銀山の歴史については、『輝き再び石見銀山—世界遺産への道』（改定版）（山陰中央新報社、2006年）を参照。

19 松場氏は「時代が捨てたもの、地域が捨てたもの」、たとえば古い瓦や廃校の階段などを拾って、群言堂や阿部家の一部に組み込んで活かしこられたそうである。「捨てられたもの」であってもかつての生活のかけら、過去の記憶の断片である。それが日常の生活に活かされる。これは素晴らしいことである。筆者は、島根県を出て以来、大阪、広島、鳥取と住んできたが、残念なことにそのいずれも戦災や天災によって日常のなかに過去を伝えるものを失ってしまった。過去の記憶を失った街はやはり寂しい。

筆者は松場氏のお話を聴きながら、講演タイトルに「地域づくり」と入れてしまったことを後悔した。この作為的な言葉は松場氏には似合わない。それゆえ、ここからは、松場氏の暮らし・仕事と「地域のありかた」との関係について考えよう。

ご本人には「まちづくり」をしてきたつもりはほとんどないようである。対談記録には、「楽しいこと、自分の人生がこうありたいと思うことを夢に描きながら生活してきた。」店をつくる時には、「何を大切にするメーカーであるのかをしっかりと伝えられる」店にしようとした、とある。さらに、「今思うと、私はものづくりをしながら何か社会にメッセージを送りたいと思ってきたのではないかと感じます」と語られている。「自分」を大事にしながら日常の仕事を通して社会と関わり貢献しようとしてこられたことがわかる。

筆者がお店を知ったとき、「ブラハウス」という聞いたことのない名前がついていた。「ブラ」というのは、フィジー諸島で使われている挨拶語で「やあこんにちは」という意味だそうである。それがあるとき「群言堂」に変わった。この言葉は、「皆が目線を同じにしてワイワイ好きなことを言いながらも、いい流れをつくっていくこと」を意味するという。つまり、松場氏のお店は最初から「人に開かれて」いたといえる。「群言堂」は、ひとひとが気ままに集い語り合う、そこから生まれたことが起点のひとつになる、そういう背景から選択された言葉なのである。実際、群言堂は、昼間は一般客が集まる空間、夜は行政に関わる人たちを含めて地域のキーパーソンが集って酒盛りをする空間になっていく。「私たちは人が集る、そういう場所づくりをしてきたのではないかと思います<sup>20</sup>。」「自らを開いた」人の生き方が地域に変化をもたらした好例だといえるだろう。

このほかに興味深いのは「鄙のひなまつり」である。これは、女性が変わればまちが変わるという考えから、いなかの女性の意識を変えることをテーマにしたイベントで、もっぱら男性が世話をし盛り上げた（これ自体、特に田舎では驚きである）。10年間で惜しまれつつ終えたが、町の会合で女性たちから説得力のある面白い意見が出るようになったという。また、年に1回大森町の住民が集って集合写真を撮り、全戸に配付している。現在、18年目で、50年を目標にしているそうである。これは素晴らしい企画ではないだろうか。まさに顔の見えるまちの記憶である。住民は懐かしさとあたたかさ、涙とともに振り返ることがあるだろう。この二つは地域に対する明確な意図をもった働きかけである。

このように「暮らしを創る」のは細部を大切にしたい、実に繊細な営みである。もちろん、暮らしは行政と無縁ではありえないので、行政との関係もみておこう。世界遺産に登録されて観光客が増加するに伴い種々の問題が出てきたことは周知の通りである。外からみていると、バスの運行や駐車場の問題など、行政と住民との間でしっかりと協議が重ねられて、比較的良好な関係にあるように見える。それでも、そこに生きる当事者であり、暮らしを大切にする住民の側からすれば、問題となる場合もあるようである。たとえば、神社のすぐ近くに公衆トイレを作ったり、夥しい数の案内標識を設置しようとしたらすれば、まちの心地よい景観と雰囲気は壊れてしまう。協議の結果、標識の数は大きく減らされたそうであるが、住民との念入りな協議と細やかな配慮が行政に求められているといえるだろう<sup>21</sup>。

20 この群言堂の原点は「ろうそくの家」にあるという。電気もガスも水道もない小さな家。この文明を排除した、何も無い家で、静かに流れる水の音、そよぐ風の音、ろうそくの明かりを楽しみながら語り合うのだという。まさに「五感の蘇る家」である。

21 大森町は今、危機に直面している。高齢化率37%、14歳以下の若年人口率約10%（ともに平成17年度のデータ）と、人口の急減に苦しんでいるのである。それは公民館の再編や小中学校の統廃合問題という形で表

以上、3名の講師のお話を紹介してきた。この中には、既に述べたように地域学として学ぶべき点が多々ある。これについては「5. 筆者の地域学理解」で検討するが、ここでひとつだけ指摘しておきたい。それは、仲野准教授が「自分から考える地域」で指摘したことの多くがとりわけ松場氏の取り組みの中で実現しているのではないかと、ということである。「自分」があって、「土地」・「地域」・「人」・「過去」に「開かれている」。そこから様々なものとの良質な関係が生まれているように思われるのだ。

外部講師のお話に対する学生の反応も記しておこう。はっきりいって、われわれ教員が語るときは会場の雰囲気はかなり違っていた。学生たちの目は講師の方に向かって、会場は心地よい緊張感に満ちていた。筆者は、たまたま松場氏がお話される時背後でパソコンを操作しながら聴いていたので、学生の真剣なまなざしを真正面から見ることができた。そこには聴き逃すまいとする意思が強く感じられた。学生だけではなく、筆者自身も「よきもの」に触れて、時間がたつのを忘れるほど集中して聴いていた。

この違いはどこから来るのだろうか。講師のお話が具体的であったこともあるだろう。苦難の多い、切実な取り組みであったり、遊び心のある楽しい経験と苦い思いが混じっていたりした。長い時間をかけた取り組みでもあった。しかし、どのお話にも一つ一つの言葉に力があり、その背後にある、見えないものが波のように伝わって、圧倒された。地域学に関わる教員としては、まずはこういう点にしっかりと目を向けたい。そして地域学に何ができるのか、どういう限界があるのかを考えたい。

#### 4. 地域住民の生活と行政

人の生活を支えているものは何だろうか。筆者の場合、思い浮かぶのは、人と人とのつながり、日常性（フェルナン・ブローデル<sup>22</sup>）、ノーム（規範・振舞い方・考え方や感じ方）など、主として文化的な側面である。しかし、それだけでなく、否、それ以前に、生活環境が重要であることは、野田北の事例を待つまでもなく、明らかである。もしこれが脅かされるようなことがあれば、それをなんとしても守るために行動しなければならない。なぜなら、ハード面であまりにも深刻な難点を抱えてしまえば、ソフト面でいかに工夫してもどうにもならない場合があるからである。こうしたとき、どのように行動するのか、振舞うのか、これもまた地域の文化である。

---

面化しているが、小学校を廃校にしたい行政と存続を願う住民の間で見解の相違が生じている。住民にとって切実な問題をめぐって、行政と住民との関係が問われているのである。筆者は2008年10月10日に大森町で「学校と地域—小学校の存在意義—」という講演を行い、住民と意見交換をすることができた。小学校が大森町という地域を支えてきた重要な制度であるだけに、住民の認識は深く学校存続に向けての意欲も強い。しかし、行政との認識の隔たりがあまりにも大きく、住民は苦悩している。

22 ブローデルのいう「日常性」は二つの側面をもつ。人々が生活を営むのを助ける半面で、判断・行動を制約している。以下の文章は示唆に富んでいる。「私が出発したのは日常性であった。生活の中でわれわれはそれに操られているのに、われわれはそれを知ることすらしないもの。習慣 (l'habitude) —慣習的行動 (la routine) とするほうがいいかもしれない—、そこに現れる何千という行為は、それら自身で完遂され、それらについて誰も決定せねばならないということはなく、本当のところ、それらはわれわれのはっきりとした意識の外で起こっている。人間は腰の上まで日常性の中に浸かっているのだと私は思う。今日に至るまで受け継がれ、雑然と蓄積され、無限に繰り返されてきた無数の行為、そういうものがわれわれが生活を営むのを助け、われわれを閉じ込め、生きている間じゅう、われわれのために決定を下しているのだ。」フェルナン・ブローデル『歴史入門』(太田出版、1995年)、18-19頁。

これからそういう事例を一つ紹介しよう。授業で報告したのは、筆者と一盛真准教授である(「行政と住民自治」)。

自然の豊かな、環境のいいニュータウン(都市計画法に基づいて県と市の要請により地域振興整備公団が開発)がある。ところが、市がニュータウン内の住宅地(約60戸)と道路一本隔てたところに工業団地を建設するプランを作成した。近々高速道路が開通するので、それに合わせて企業(製造業)を誘致したいが、今すぐ利用できる土地がないので、住宅地に隣接する民間企業の土地を土地開発公社に買い取らせて工業団地にするというのである。市は住民向けの説明会を3回ほど開催した。問題の土地に隣接する住民は当初反対したが、結局、4ヵ月後に受け入れを決めた。

読者はこの事例をどう思われるだろうか。もっとも「自分」をどこに位置づけるかで、思いは異なるだろう。この住宅地の住民でなければ、「関係ない、どうでもいい」問題かもしれない。もし住民であれば、「とんでもない」と思われるに違いない。それとも無関心であろうか。

筆者としては、できれば「自分」の問題として考えてもらいたい、どの立場であれ、素朴に考えて「おかしい」と思われるであろう。「えっ!住宅地のすぐ隣に工業団地?」市はこんなことをしてもいいのか。住民はなぜ受け入れてしまったのだろうか。工業団地ができれば生活環境が悪化するだけで、いいことなどひとつもないのに。と、こんな疑問がたちまち浮かんでくることだろう。

本章では、この問題について次の3点を検討する。①市はどんな論理でこのプランを説明したのか、どこまで説明したのか、しなかったのか。②なぜ住民は受け入れたのか。③この事例から何を学ぶことができるのか、である。

市の説明(第1回、2回説明会)はシンプルなものである。ごく簡単な図面を示して、主に次の内容を文書と口頭で説明しただけである。住宅地との間にわずかな幅の緩衝地帯を設け、商店用の土地として売却する。交通量の増加を考慮して工場用道路を建設する。メリットとしては、たとえば、工業団地にすることで周辺環境・景観が向上するという。そして、住民の合意がなければ工業団地は造らない、である。

ここには驚きの論理がある。工場を作って環境・景観がよくなるとはどういうことだろうか。デメリットについては何の言及もないが、工業団地を造るにもかかわらず、住民にはデメリットなどないというのであろうか。この土地を選択した理由が文書に明記されていないのはなぜか。これだけの説明で、住民の合意が得られると思っているのだろうか。実に不思議である。

それでは説明されなかったことは何か。問題の土地は、都市計画法に基づいて造成されたニュータウン内にある。したがって、同法によって土地の用途の指定(「用途地域」)がなされているはずである。「用途地域」によって法的規制力が異なるから、現状がどういう用途地域で、工業団地にするためにどのような用途地域になるのか、これは住民にとって極めて重要な問題である。ところが、当初、市はこれについて一言も語らなかった。住民側から質問が出て初めて説明したが、ひどくあいまいであった。実際には、現状が「商業地域」で、それを「工業地域」にすることになるから、法的規制力は著しく弱まるのである。住民にとって、これは生活環境を守るために最も有効な法的手段を失うことを意味している。このように最も重要な情報が伝えられなければ、住民は現実を正確に認識できない。これでは合意に必要な前提条件が満たされたとはとてもいえない。

次になぜ住民は受け入れたのか。この問題は隣接町内会の臨時総会と定例総会で検討され、決定された。臨時総会では出席者全員が反対の意向を示したが、定例総会では無記名投票の結果、「受け入れる」が若干数上回った。

ここで問題なのは、「当事者として関与すべき住民とは誰か」である。市は今回のプランを最初

にニュータウンの町内会長全員で構成されている自治会執行部に持ち込み、ほぼ了承を得ている。このとき、執行部は隣接町内会の合意を得るという条件のほかに、工業団地を造ることを前提として市に諸々の条件をつけている。つまり、住民として想定されているのは、隣接町内会というよりもニュータウン全体なのである。後者を代表しているのが、自治会の執行部というわけである。

さらに問題なのは、この執行部の意向と隣接町内会のそれとが一致しなかったことである。問題の土地は隣接町内会以外のところとはかなり離れていて、そういうところの住民には工業団地ができてほとんど影響がない。したがって、同じ「当事者」であっても、隣接町内会とそれ以外とは、問題の深刻さと受け止め方がまったく異なるのである。執行部は、所有者である企業が問題の土地（松と草地の状態を商業用地として利用されておらず、いわば「死んだ」状態になっていた）を売却した場合、どんな企業が買い取るかわからないので、それなら土地開発公社に買ってもらって工業団地にしたほうがニュータウンの生活を守れると主張していた（これもまた不思議な論理である。隣接町内会住民の生活は守れない）。また、公社が土地を購入することで企業の経営するスーパーの存続が容易になるとも語った（ニュータウンの住民にとってスーパーはなくてはならないものである。しかし、企業から買い取ることは逆の結果を招くと筆者には思われる）。市は説明会で住民の強い反対にあって、何もできない状態になったが、執行部の方は隣接町内会に執拗に受け入れを求め、最終的に目的を果たした。市の求める住民の合意を自治会執行部がとりつけたのである。

この間の執行部のやり方には疑問が多い。執行部は、当初、市に実質的な同意を与えてからほぼ2週間で隣接町内会とニュータウン全体の合意をとりつけ、受け入れを市に回答する予定にしていた。隣接町内会にとって深刻な問題であるにもかかわらず、簡単に合意が得られると考えていたようである。それにしても、どうしてそんなにことを急いだのだろうか。執行部が作成した2回の説明会のための案内文にも問題がある。文面のどこをみても、工業団地をつくるとは書かれていないのである。これでは、案内文を見た住民は事態を正しく認識できない。たいした問題ではないと判断して説明会に出席しない可能性が高い（実際、ニュータウン向け説明会には、隣接町内会の住民以外には、ほとんど参加者がなかった）。つまり、住民は何も知らないままに合意したことになってしまうのである。ここには、確かな合意を形成するためにできるだけ多くの情報を正確に提供しようという姿勢は微塵もない。そもそも執行部は議事録を作成していない。これほど重要な問題であっても、何が話し合われたのか、決定されたのか、本当のところは会議に参加した者にしかわからない。確認のしようがないのである。執行部の強引さに問題があること、これはいうまでもない。

隣接町内会の住民にも問題があった。説明会等で明確に反対を表明した住民はごくわずかであった。発言すること自体をためらったようである。問題を自分達でよく検討し決定するという意識が稀薄ではなかったろうか。「上」が決めたことには逆らえない、反対したら他の町内会の住民に嫌われてしまうのではないかと、「怖くて発言できない」、そんな不安もあったように思われる。また、どうせもう決まっているから反対しても無駄だとか、関心がない人も少なからずいたようである。このほかに、反対してスーパーがなくなったらどうしようという懸念もあったかもしれない。こうした点を考えると、住民は反対を明言できる状態になかったのかもしれない。このことは住民がどのような文化を生活しているのかをよく示している。ということは、問題は今回だけにとどまらないということである。

不運でもあった。この町内会ではできたばかりで（結成1年目）、まだお互いの顔をほとんど知らない。ただの寄せ集まりで、共通の意思をつくることなどではしなかったのである。それだけではない。隣接町内会の住民は賛成派と反対派に分裂してしまった。この経験は消しがたい記憶となっ

て残るに違いない。深い亀裂を抱えたままでは、コミュニティになれない。なんという不幸だろうか。

どうしてこういうことになってしまったのか。根本的な原因はニュータウン計画の失敗にあると思われる。現在、住民数は当初予定の半分でしかなく、未利用の土地がかなりある。本来、作られるはずであった中学校も建設されず、商業施設用地として民間企業が買い入れた土地も、ニュータウンに人が集まらなかったために、その多くは「死んだ」状態である。住民にしてみれば、市に裏切られたという思いが強い。それがさまざまな不安と、ときに筆者にとって不可解な行動を生み出しているのかもしれない。市も困っているのであろうが、ニュータウンの住民も隣接町内会の住民も行政に翻弄されている。説明会で、市の代表は「柔軟に対応してきたおかげでニュータウンが発展してきた」と述べたが、その「柔軟さ」のせいで苦しむのは住民である。

さて今回の事例からわれわれは何を学び取ることができるだろうか。行政に関わるものはとくに、行政とはそもそも何のためにあるのか、よくよく考えるべきである。地域学部で学ぶ学生の中には、将来、行政に関わることになるものもいるだろう。行政マンとしての使命は何か、どこに目を据えて行動すべきか、考えるべきである。

次に、合意とは何か、合意が成り立つ前提は何か、民主主義とは何か、こうした問題を根本的などころから考えなければならない。伝えるべきことを伝えず、無理やり了承させて、それで合意といえるだろうか。一部の人間が情報を抱え込み、自分たちだけで決定して、それで民主主義だといえるだろうか。また、民主主義とは、本来、発言することが大前提である。発言できない、発言を許さないでは、民主主義とはいえない。地域がよくなるためには、住民間で情報を共有し、多くの人々の知恵が集まるような状態が不可欠であろう。今回の事例のように、自分とは無関係に、どこかで誰かに勝手に決められてしまうという経験ばかりを積み重ねていけば、空しさと無気力が蔓延してしまう。そうならないためにいったいどうしたらいいのであろうか。少なくとも「人間の尊厳」ということをよくよく考えるべきである。別の言葉で言えば、人を大事にすることを心がけねばならない。これはまさに文化の問題である。

実は、報告者である筆者と一盛准教授は隣接町内会の住民である。わたしたち二人は積極的に情報を集め熟考し、自らの見解を論理化して、市や自治会執行部と臆するところなく論争した。つまり、はっきりと反対した当事者なのである。そういうふうには振舞った者として、反省すべき点もある。ひとつは、配慮と慎重さが足りなかった。自分たちの言葉や態度が同じ町内会の人たちにどのように受け止められるか、もっとよく考えるべきであった。今思えば、彼らがどのように感じ考えるのか、どう振舞うのか、よくわかっていなかった。率直に言って、それはわれわれの想像をはるかに超えていた。今もって分からないところが少なくない。文化が違いすぎるのであろうか。

もうひとつ、先に述べたこととある意味で同じことになるかもしれないが、われわれの思考方法、言葉、表現の仕方が町内会の人たちに十分理解されなかった可能性がある。言葉も論理も通じなかった、そういう印象を否定できないのだ。その原因は複雑かもしれない。なんにせよ、これはきわめて深刻な問題ではないだろうか<sup>23</sup>。互いに通じ合えるような言葉や表現を工夫しなければならない。

最後に、筆者の個人的な経験はまったく否定的なもので、率直に言って怒りを鎮めることが難しい。先に文化的な問題があると述べたが、それでも、文化の違いやそれが抱える問題点が直ちに顕

23 この問題については、古い作品であるが、芹沢光治良「死者との対話」(『芹沢光治良文学館10』, 新潮社, 1997年)が参考になる。初出は1948年。



在化・問題化するわけではない。われわれの町内会も工業団地を造るとする市の提案さえなければ、波風が立つこともなく、時とともに顔見知りになって、いい関係ができたかもしれない。このように地域がおかれた大きな状況・構造が及ぼす影響は無視できないのであるから、安易に答えを決め付けず、大きな構造のなかで（と同時に具体的に）問題を捉える努力をすべきであろう。

## 5. 筆者の地域学理解

「地域学総説」に関わってきたわれわれ教員は、共同論文『「地域学」を創る—鳥取大学地域学部の試み—』<sup>24</sup>を著して、いまなぜ地域なのか、地域学なのか、地域とは、地域学とは何か、といった基本的な点について、すでに検討している。筆者も同論文において「暫定的な『地域学』理解」を提示している。詳しくはそちらをごらんいただくとして、本稿では本年度の授業内容に即して、筆者の地域学理解を示すことにする<sup>25</sup>。

### (1) 二つの視点について

本稿では最初に「地域を考える二つの視点」を紹介した。俯瞰的・客観的視点と「自分から考える地域」である。これらは他を排除するものではない。どちらの視点も「地域学」にとって不可欠で、互いを補完することで初めて「地域学」が成り立つといえる。問題は両者の関係である。

筆者は次のように考える。「地域」を構造的に捉えようとすれば光多説が有効である（図2 地域学の体系）を参照）。しかし、なぜ地域なのかという問いに対しては、光多説の国土計画・地域政策の観点からの説明に加えて、「文化装置としての地域」・「地域の尊厳」・「人間の尊厳」という吉村説が重要である。ここではじめて、「地域」を文化と個人との関係から捉えることが可能になるからである。ここからは、個人と「地域」との微妙な関係、すなわち、個人の基底的部分をつくり、その感じ方や考え方・振る舞い方のかかなりの部分を枠付け支えるとともに、個人を制約するものでもある「地域」の二つの側面が見えてくる。さらに「生の充実」という、個人からみたときの「地域学」の目的も明確になる。こうして、地域の構造的把握の中に個人がしっかりと位置づけられるのである。

第二の視点である仲野説は、客観的な個人という捉え方ではなく、より主観性の強い「わたし（自分）」を中心に据えて、そこから周囲をながめる。そこで見えてくるのは、他者との関わり、人と人とのつながりとそのありよう、さらには「わたしの幸福/わたしたちの幸福」という問いである。「地域」はこのような関係のひとつとしてリアリティと切実さをもって認識される。もちろん、「地域」の負の側面も視野に入ってくる。したがって、「わたし（自分）」にとって「地域」は絶え

24 柳原邦光他『「地域学」を創る—鳥取大学地域学部の試み—』『地域学論叢（鳥取大学地域学部紀要）』第4巻第3号。このほか、藤井 正・光多長温・小野達也・家中 茂 編『地域政策入門 未来に向けた地域づくり』（ミネルヴァ書房、2008年）を参照。

25 共同論文から筆者が地域学の目的に関して述べた箇所を引用しておこう。「地域学とは、『自己』（あるいは『個人』）を出発点として、ひとりひとりの『生の充実』、『生活の質の向上』を『地域』という『共同性』との関係において考え、その実現を目指すものである。なぜ地域なのか。人は必ずどこか特定の地域に生れ落ち、日常生活を送りながら共同性（『地域文化』といってもいい）を身につけていく。この意味で地域は自己に先立ち、自己を創っていくものである。個人化が進み人の移動も激しいこんにちではこの共同性は薄れ、実感するのが難しい場合があるかもしれないが、自己と人とを結びつける重要な契機のひとつであることは確かであろう。」柳原他前傾論文 370 頁。

ず見直しの対象であり続ける。到達点はない。

筆者は何も考えなくても自ずと関心が「地域」に向かうような人間ではない。むしろこの言葉に違和感というか、息苦しさ、狭さを感じている。筆者には、いきなり「地域」という空間的・集团的枠組みから考えるよりも、「わたし（自分）」から発想することで、人と人とのつながりの重要性を納得することができ、「地域」への関心も湧いてくるように思われる。自分を大事にすることが人との関係を尊重することにつながっていくからである。「地域」と「地域学」へのモチベーションを高めるのは、この第二の視点ではないか。

筆者は、「わたし（自分）」を出発点としつつ、常に二つの視点から考えたい。それぞれの視点ではじめて見えてくるものがあるし、逆にそれによって見えなくなるものもある。二つの視点に立つことでこの欠陥を埋めることができるだろう。

## (2) 実践例から学ぶ

第二の視点のポイントを凝縮して示せば、「当事者性（自分の人生の主人公であることを貫くこと、自分の心の中に小さな誇りをもつこと）」と「人に頼り、また人を助ける、自分が弱っても倒れない関係性」（仲野説）ということになるだろう。2点目の関係性に関しては、筆者はまだ具体的なイメージを思い描くことができないので、なんともいえないが<sup>26</sup>、少なくとも「当事者性」については、橋谷田氏も含めて外部講師の方はどなたも「わたし（自分）」がとても強いといえる。強いというのは、自分の感性や考え方を大切に、そこから発想し行動しているという意味である。もちろん、この強さは何が何でも自分の思い通りにするという意味ではない。それは次の言葉からもうかがえる。「過去と他人は変えられないが、未来と自分は変えられる」（松場氏）。これこそ「当事者性」を高次のレベルで示す言葉であろう。学生たちが外部講師の方々のお話にした反応は、ひとつにはこうした点からきていると思われる。

この「当事者性」を実現するには、最低限必要な条件があると思われる。たとえば、野田北のように「何でも言い合える」、「発言できる」ことである。情報をきちんと伝え、そのうえで合意を形成しようとする姿勢である。現実には、どこでもこの条件が満たされているわけではない。筆者が経験したのは、残念ながら全く逆である。合意の形成というよりも、同意の強制であったと感じている（そもそも「当事者性」とか、それを尊重するという考え方があるのだろうか）。これでは「わたし（自分）」の気持ちは「地域」には向かわないし、エネルギーも生まれない。このような違いも、地域性（地域文化）の現れだといえるだろう。

行政には「当事者性」を尊重してほしい。近年、「協働」という言葉をよく耳にするようになった。この美しい言葉は行政と住民との対等な関係を前提としているように思われるが、はたしてそれは実現可能なのだろうか。権力・権限をもっているのは行政である。形ばかりの協議の結果、「住民の合意」が得られたとして行政が決定してしまえば、もはやそれを止めることは難しい。行政は住民の生活についてどれくらい感度の高いセンサーを備えているのだろうか。行政にとって他人事にすぎないかもしれないが、当事者である住民には逃げ出すことができない、そういう切実な問題もあるのだ。住民の実生活からみたとき、いわば第三者でしかありえない行政と、当事者であ

26 本稿がほぼできあがった頃、一冊のノンフィクションを読んだ。城戸久枝『あの戦争から遠く離れて』（情報センター出版局、2007年）である。筆者はこの本から、人と人とのつながり、過去とのつながり、「関係性」について、多くを学んだ。

り生活者である住民との違い。行政はこの点をよくよく考えてほしい。近頃では、本来住民だけで意思決定すべき場に行政職員を介在させようとする動きがあるようだが、行政と住民との本来的な立場の違いとそこからくる捉え方の違いを考慮すべきである。「当事者性」を尊重できないのなら、行政の関与は迷惑である。最悪の場合、住民意思の乗っ取りになりかねない<sup>27</sup>。

「当事者性」と関連して、「わたし（自分）」を「開く」ことも重要ではないだろうか。野田北の河合氏の場合、活動の場は生まれ育った地域であるが、橋谷田氏と松場氏はそうではない。成人してから移り住んだのであり、現在の地域で生まれ育って文化を身につけたわけではない。裏を返せば、異質なものをもって入ってきたのである。新しい土地に適応する苦労があったに違いないが、たとえば、松場氏の口から出てきたのは苦労話ではなく、「自然と向こうから語りかけてくる」、「土地の声を聞く」、「大地から力をいただいて物をつくっているような気がします」という、土地に対する敬意に満ちた言葉である。ここには見事な「育ち合い」（奥野教授）の関係があるように思われるが、いったいどうすればこういう受け止め方が、関係が、できるのであろうか。自分をしっかり保ちながら、地域にも、過去の記憶や人にも、自分の感性を開いて力を得ているというのが、筆者の印象である。

これは筆者とはまったく異なる捉え方である。筆者の実家は大森町（松場氏の居住地）のすぐ近くにあるが、見上げれば、大森町と同じように空が狭く、山の端に取り囲まれている、そんなところである。かつて筆者はこんな狭い町から広いところに出たいと切に願った。今も住みたいとは思わない。松場氏とは大違いである。なぜだろうか。個人の違いはおくとして、よく考えてみれば、距離的に近いとはいえ、町の性格が違うのかもしれない。筆者の町と違って、大森町は戦国末期以来、人口も多く、人・物・情報・文化の出入りがかなりある「都市」であった<sup>28</sup>。「開かれていた」時代の記憶が刻み込まれて、町の個性となっているのだろうか。いったい大森町とはどんな町なのであろうか。

どうしてこんなことを言うかという、と、「地域学」について次のように考えるからである。「地域学」の究極の目的は、「地域を創る」ことである。それは次の3段階からなる。まず「地域はどう在るのか」、それを踏まえて「地域はどう在るべきか」、それを導きの糸としつつ「地域を創る」という実践が生まれる（吉村説。光多説も表現は異なるが、言わんとしていることは同じであろう）。これ自体は単純な論理である。しかし、文化的に「地域はどう在るのか」を知ることはかなり難しい。吉村教授がノーム体系の自明性として、フェルナン・ブローデルが「日常性」という言葉で表現しているように、地域性は長い時間をかけて歴史的に形成されたものであるから、その中で生きているものには当たり前すぎて自覚できないのだ。ところが、これが将来の地域像、「地域はどう在るべきか」を大きく左右するのであるから、「地域」が発展するには、まずは「地域はどう在るのか」を意識的に知ろうとすることが重要なのである。もし地域性のなかに、生活している人間にとって好ましくないものがあれば、それは捨て去るべきものであろう。

それでは「地域はどう在るのか」を知るにはどうすればいいのだろうか。こういう点も「地域学」として検討しなければならぬ問題であろう。他の地域や異質なものと比較したり、他者（外部）の目を活かすことが考えられるが、他からやってきて地域にとけこみ、地域から学び、地域を活か

27 住民と行政との関係については、家中茂「コミュニティベースの政策論」（藤井正・光多長温・小野達也・家中茂編著『地域政策入門 未来に向けた地域づくり』、ミネルヴァ書房、2008年、84～102頁）を参照。

28 『輝き再び石見銀山—世界遺産への道』（改定版）（山陰中央新報社、2006年）参照。

し、好ましい方向に変えていく起点のひとつになった松場氏のようなケースは、多くの点で「地域の変化」を考える素材を提供してくれるのではないだろうか。

## おわりに

本年度の授業の最後は、「行政と住民自治」を中心テーマとしたディスカッションであった。この問題の当事者の一人として率直に言えば、議論のなかで他の教員・学生と問題意識も論理もすれ違えばかりで、もどかしく、虚しい思いにとらわれてしまった。同僚の教員たちはディスカッションを実りあるものにするために何度も長い時間話し合い、論点を整理し流れを作ってくれた。学生たちも真剣に聴いて発言してくれた。本当に感謝している。しかし、その努力にもかかわらず、当事者の切実な思いはこれほどまでに第三者の胸には届かないものか、と筆者は悲しくなった。もちろん、報告者である筆者ともう一人の教員の力不足もあるだろう。思いをうまく表現できなかったのかもしれない。

当事者と第三者との間の大きな隔たり。この「事実」を地域学の研究者の立場からどう考えるべきであろうか。研究者として、当事者に「あなたはきちんと表現できていませんよ」といえるだろうか。当事者に表現力や語る力が足りないことは十分ありうることである（そもそも当事者に冷静に語ることを求めることには無理がある。さらに言えば、そう努力することで失われるものもあるのではないか）。それを指摘して済む問題だろうか。筆者がたまたま当事者になって思うのは、「地域学」はどうしたら当事者の思いに迫ることができるだろうか、ということである。このような問題を知らないまま、学生が「地域学」を学んでわかったつもりになって、自らを高いところにおいて見下ろすようになったら、まさに悲劇である。

「地域学」が「学」たらんとする以上、認識の対象から一定の距離をとらねばならない。それはわかる。しかし、それで見るとべきものがすべて「見える」ようになるわけではあるまい。筆者に正答はないが、本稿を執筆しながら、「わたし（自分）からの視点」を「地域学」に導入することの意義を改めて思った。本稿で、本来言及すべきことが多々あったにもかかわらず、それを無視して論点を絞り込んだのは、そういうわけである。外部講師の方のお話をかなり具体的に紹介したのも、同じ意図からである。当事者の声にできるかぎり耳を傾け、「地域学」に取り込みたかったのだ。「生きられた空間」としての地域。筆者はこのアプローチを大切にしたい。

最後に、「地域学総説」で今後検討すべきだと筆者が考える問題を3つほど指摘して終わりにしたい。吉村説によれば、「地域」は人間を一人前にするための「文化的装置」である。もちろん「理念型」であるから、これに当てはまらない存在もあるが、なかには無視できないものもある。たとえば、仲野准教授は、第10回目「ローカルのグローバルな基礎とグローバルのローカルな基礎—わたしの幸福とわたしたちの幸福—」で、日本経済が外国人依存を強めるなかで深刻化する外国人のこどもたちの「宙吊り状態」について論じている。彼らの存在は制度的に想定されていないので、日本の教育制度にも地域にも居場所がない。不就学の結果、日本語も母国語も不十分で、しばしば自分を律していくことさえ困難になり、さらに大きな問題を抱えるようになる。吉村説にしたがえば、これは危機的状況である。また、これほど深刻でなくとも、親の転勤にともなって転校を繰り返すこどもたちの場合、どうしても「地域」との関係が稀薄になる。「育ち合い」にならない。このようなケースも含めて、人と「地域」との関係を人の移動という観点から検討すべきであろう。

以上のように「わたし」や人に着目して地域を見るということは、「生活者」という視点から考

えるということでもある。俯瞰的な視点は不可欠であるが、ここからは「生活者」の切実さはみえてこない。「地域学」は「生活者」の視点からもっと多くを学び吸収していくべきではないだろうか。

もうひとつ、教育の問題も「文化的装置」の機能を危うくしている。いうまでもなく教育は学校教育だけではない。広く家庭・地域・学校の関係（一盛報告）のなかで考えるべきである。「育ち合う」という観点からいえば、小中学校の統廃合問題のような「地域」を支えてきた諸制度の衰退（あるいは消滅）は、人が「育つ」過程を崩壊させ、「地域」を根底から揺るがす<sup>29</sup>。「地域学」においても「地域」を変化・危機・創るのプロセスのなかで捉えることが必要であろう。

## 参考資料

### 〔資料 1〕 授業日程

#### 第 1 部 地域とは何か

1. 4/9 「地域を見る視点」（光多長温教授）
2. 4/16 「地域で生きる」（吉村伸夫教授）
3. 4/23 「自分から考える地域—わたしがここで生きるということ—」（仲野誠准教授）  
ゲスト：橋谷田岩男氏（会州堂店主）
4. 4/30 『『育つ』から地域を考える』（奥野隆一教授）  
〔第 1 回レポート（配点 50 点）〕  
課題：「わたしにとって地域とは何か」（第 1 回から第 4 回までの授業内容を踏まえて書く）

#### 第 2 部 公開講演「地域を創る II」

5. 5/14 「震災からのまちづくり」 河合節二氏（野田北ふるさとネット事務局長）  
司会 家中茂准教授
6. 5/21 「小規模林業を見直してみませんか～小規模林業の復活で森林の再生と山村活性化を～」  
中嶋健造氏（NPO 法人土佐の森・救援隊事務局長，西日本科学技術研究所） 司会 家中茂准教授

#### 第 3 部 地域学とは何か

7. 5/28 「わたしにとっての地域学」（柳原邦光准教授）
8. 6/4 「地域と教育」（一盛真准教授）
9. 6/11 「景観変遷から読む鳥取の風土と人々の暮らし—身近な鳥取のことを知ろう—」（小玉芳敬准教授）
10. 6/18 「ローカルのグローバルな基礎とグローバルのローカルな基礎—わたしの幸福とわたしたちの幸福—」（仲野誠准教授）
11. 6/25 「歴史的遺産と地域づくり—地方の可能性—」 松場登美氏（他郷阿部家）  
司会：家中茂准教授（公開講演）
12. 7/2 「行政と住民自治 I」（一盛准教授，柳原准教授）
13. 7/9 「行政と住民自治 II」（一盛准教授，中村英樹講師，相澤直子講師，司会 家中茂准教授）
14. 7/16 全体ディスカッション（中村英樹講師，柳原准教授，家中茂准教授，司会 藤井正教授）  
〔第 2 回レポート（配点 50 点）〕

29 若林敬子 『学校統廃合の社会学的研究』，御茶ノ水書房，1999 年，65～71 頁。

課題：「わたしにとって地域学とは何か」（第1回から第14回までの授業内容を踏まえて書く）

実施責任者：一盛真准教授，柳原邦光准教授

〔資料2〕公開講演「地域を創るII」

地域学部地域学研究会主催

(1) 午前の部（10時30分～12時）

- 5/14 「地域と教育—コミュニティスクール」 渡部昭男（地域学部教授・地域教育学科），  
杉本由香里氏（南部町教育委員会・指導主事）
- 5/21 「鳥取県の地域課題」 青木由行氏（鳥取県企画部長）
- 5/28 「鳥取大学の地域連携活動」 野田邦弘（地域学部教授・地域文化学科），学生
- 6/4 「農業の再生をめざして」 田中正保氏（（有）田中農場代表取締役）
- 6/11 「鹿野町のまちづくり」 家中 茂（地域学部准教授・地域政策学科），  
佐々木千代子氏（いんしゅう鹿野まちづくり協議会副理事長）
- 6/18 「過疎のまち日南町と大学の連携」 永松 大（地域学部准教授・地域環境学科）
- 7/2 「驚異のマネジメント～八雲国際演劇祭」 園山土筆氏（八雲国際演劇祭マネジングディレクター），  
司会：五島朋子（芸術文化センター准教授）
- 7/9 「鳥取大学の挑戦～鳥インフルエンザの世界的蔓延防止～」  
伊藤壽啓（農学部教授）
- 7/16 「ものづくりイベント」 土井康作（地域学部教授・地域教育学科）

(2) 午後の部（16時20分～17時50分）

- 5/14 「震災からのまちづくり」 河合節二氏（野田北ふるさとネット事務局長）  
司会：家中 茂（地域学部准教授・地域政策学科）
- 5/21 「小規模林業を見直してみませんか～小規模林業の復活で森林の再生と山村活性化を～」  
中嶋建造氏（NPO 法人土佐の森・救援隊事務局長，  
西日本科学技術研究所）  
司会：家中 茂（地域学部准教授・地域政策学科）
- 6/25 「歴史的遺産と地域づくり—地方の可能性—」  
松場登美氏（他郷阿部家）  
司会：家中 茂（地域学部准教授・地域政策学科）

(2008年10月14日受付，2008年10月16日受理)